

聖書：ルカ 24：13～35

説教題：苦しみ、それから栄光へ

日時：2013年4月7日

ちょうどこの日、二人の弟子がエマオという村に行く途中であった、と今日の箇所は始まります。この数日間に彼らの目の前で展開したことは、目もくらむような出来事の連続でした。自分たちが主と信じてついて来たイエス様はろばに乗り、エルサレムで熱狂的に歓迎されました。そしていよいよこの方によって神の国が打ち建てられるのだろうか待ち望んでいたところ、1週間もしない内に、ユダヤの最高議会から有罪判決を受け、ローマ総督の手に渡り、気がついた時には当時の極刑である十字架刑に処せられてしまいました。そしてその日のうちにヨセフの墓に葬られた。まさに勝利から墓に突き落とされたのです。

その彼らはこの週の初めの日の朝、イエスの体が見当たらないというニュースも耳にしていました。御使いたちが現われて「イエスは生きておられる」と告げた、というのです。一体これはどういうことなのか。彼らは話し合ったり、論じ合ったりしながら、歩いていたわけです。

そんなところへイエス様が近づいて来て、共にその道を歩いておられた、とあります。ここが今日の箇所の神秘的な部分です。二人の弟子は、それがイエス様だとは分からなかった。それは心が悲しみで一杯で、イエス様の復活を少しも信じていなかった彼らの不信仰のためでしょうか。あるいは復活後のイエス様は栄光の状態へ入られて、以前とは若干違う印象を与えられたからでしょうか。16節に「しかしふたりの目はさえぎられていて」とあります。色々な要素はあったかもしれませんが、神の時が来るまでは、彼らの前にはイエス様ご自身がおられたのに、そのことが分からないようにされていたのです。

イエス様は彼らに尋ねました。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」この言葉を聞くと、二人は暗い顔つきになって立ち止まった、とあります。私たちはどんな質問をされた時に暗い顔になるのでしょうか。自分が気にしていること、自分の心が深い傷を負っていることなどについて聞かれた時ではないでしょうか。私がこの場面で思い起こすのは、私の実家の階段の壁にかけてあった、まさにエマオ途上のこの場面を描いた版画です。3人の人がそこに描かれて、イエス様は向こうを向いていましたが、こっちを向いている二人の顔が確かに暗い。しかも版画のため、全体がモノトーンで益々暗いのです。夜に階段の電気をつけると、まずその絵が目飛び込んで来て、気味悪く思ったものです。イースターの絵なのに、どうして雰囲気こんなに暗いのか、と思ったものです。

イエス様に「どんな事ですか。」と聞かれると、二人の弟子は話し始めます。彼らがまず述べていることは、イエス様の十字架のことです。この方は行ないにも言葉にも力のある預言者だったのに、祭司長や指導者たちによって十字架につけられてしまった。私たちはこの方に望みをかけていたが、それも打ち砕かれてしまった。そして彼らはこの日の朝のニュースについても話しました。女たちが墓に行ってみたところ、体が見当たらなかったこと。御使いが現れて「イエスは生きておられる」と告げたこと、仲間の何人かが墓に行ってみたが、その通り、イエスの体は見当たらなかったこと、……。二人の弟子にとって、この知らせは当惑するものでしかありませんでした。

これはイエス様の素晴らしさを味わっても、イエス様の復活を知らない人の状態を表しています。復活したイエス様を知らなければ、人は望みを抱くことができず、暗い顔をして、この

二人のようにトボトボと歩くしかないのです。

しかし、ここに示されている望みは、イエス様がそんな彼らと共に歩いてくださっていたということです。彼らはそのことをまだ知りません。ですからこの話はスリリングなのです。これは私たちにも当てはまるでしょう。私たちもイエス様が共に歩いてくださっているのに、それに気がつかないでいるということがあるかもしれません。特に思うのは、イエス様は彼らが暗い状態に置かれていた時に一緒に歩いてくださっていたということです。先ほど私は実家にあった版画が暗くて気持ち悪く思った、と言いました。なぜイースターの話なのに、わざわざこんな暗い場面を描くのだろうかと思ったと申しました。しかしそこには大きなメッセージがあったのではないかと思います。すなわち私たちがそのように暗い道を歩いている時も、イエス様は共にいてくださる。私たちが暗い顔つきで歩かざるを得ないような道に、実はイエス様も共にいて歩いてくださっている。いやそのような暗い道こそ、むしろイエス様との出会いを経験する場所となるということです。

イエス様は二人の話聞いた後、25～26 節でこう言われます。「するとイエスは言われた。『ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光に入るはずではなかったのですか。』」そう述べてイエス様は、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた、とあります。ここで大事なことは、イエス様は単にご自分について書いてあることを旧約聖書からピックアップされたというのではないことです。ここの意味は聖書全体はイエス様に焦点を当てて書かれているということです。そして聖書はそのキリストがまず苦しみの道を通り、その後、栄光に入るということを語っている。そのメッセージをイエス様は聖書全体を説き明かす方法で、すなわち聖書の意味をオープンにする仕方で、彼らに歩きながら教えてくださったのです。

彼らは後に、イエス様から直々に聖書を教えていただいたこの経験を振り返って、32 節で「私たちの心はうちに燃えていたではないか」と述懐します。なぜそのように彼らの心は内に燃えたのでしょうか。そこには3つの要素があったと思います。まず一つは、単純に彼らは聖書を通してもう一度、メシヤは必ず苦しみを受け、それから栄光に入ることを知ったからです。二人の弟子はイエス様が十字架上で死なれたことに絶望していましたが、聖書によると、メシヤはそれで終わりになるのではない。そのように苦しむことは昔から定められていたことであり、その後には必ず栄光が来る。神は敗北で終わりになる方ではない。これを聞く時に、神とメシヤに信頼する人は誰でも心が燃やされることになるでしょう。

しかし、なぜキリストは苦しみを受けなければならないのでしょうか。第二に彼らはイエス様による聖書講解を聞きながら、そのことも考えさせられたでしょう。そしてそこに示されていたのは、一言で言って、罪人に対する神の愛です。神は罪人をあわれみ、何とか救おうとする御心を持ってくださったので、メシヤが身代わりに苦しみを受けることを予告して来られたのです。創世記3章15節、旧約儀式のいけにえの血、イザヤ書53章…など。このメッセージが正しく説き明かされるなら、私たちは神の深い愛を心に刻みつけられ、その心は当然うちに燃やされることになるのです。

そして、三つ目にキリストが私たちの身代わりに苦しみを受けて、それから栄光に入るなら、この救い主により頼む者の将来も非常に明るいこととなります。苦しみ、それから栄光に入るという出来事は、単にキリスト個人に当てはまる出来事ではなく、キリストを信じる者にも同じように起こることです。ですからたとえ自分が今、どんなに大きな苦しみ、悩み、戦いの中

にあらうとも、キリストによって、私も必ず同じ栄光に最後には導いていただける。このメッセージを聞いて心が燃えないはずはありません。これが聖書を正しく読んだ時に私たちに生じる結果です。もちろん、みことばを読んで、いつもすぐに爆発的な喜びに満たされるわけではないかもしれません。この二人の弟子も、後になって思い返してみると、心はうちに燃えていたのではないか、と言ったのです。つまり聞いた途端にカッカと燃え上がる燃え方ではなく、じっくり、じわじわと燃える燃え方です。聖書とはそのようなものなのでしょう。即効性があるものと言うより、一つ一つの御言葉が心に刻みつけられることを通して、穏やかに、静かに、しかし一生燃え続ける確実な火として、その人の内に点火されるのです。

さて、目的の村に近づいた時、イエス様はまだ先へ行きそうなご様子でした。二人の弟子たちはイエス様に「いっしょにお泊まりください」と願い出ます。もしこうしなければ、イエス様はそのまま行ってしまわれたということがここに暗示されています。29 節に彼らは「無理に願った」とあります。このようにしてイエス様との交わりを求め、イエス様を内に迎え入れる時に、その人は大きな祝福を受けることになります。讚美歌 39 番、新聖歌 336 番。黙示録 3 章 20 節：「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」 主は私たちの内に入り、ご自身がホストとなってくださるのです。この場面でもイエス様が主人役を務めてくださっています。そしてパンを取って祝福し、裂いて、恵み深いご自身を示してくださる。

その時、彼らはイエス様だと分かった！31 節に記されています。これはどういうことでしょうか。これは聖餐式と似ているからでしょうか。あるいは五千人にパンを裂いて渡された時の姿を思い起こしたのでしょうか。あるいはイエス様の手に十字架の釘のあとを見たからでしょうか。用いられた様々な要素はあったかもしれませんが、これは 16 節と呼応して、神のタイミングだったということでしょう。彼らはこの時、目が開かれ、イエス様だ！と分かったのです。そしてその瞬間にイエス様の姿は見えなくなりました。復活後のイエス様の体は、私たちの今の体と比べると、色々不思議な点のあったことが他の箇所から分かります。しかしこの二人の弟子にとって、それはもはや問題ではありませんでした。彼らはイエス様が十字架の死からよみがえり、復活しておられるということが分かったのです！その確信を持った時に、彼らはイエス様が目に見えなくても、喜びが消えることはありませんでした。彼らは急いで来た道を引き返し、エルサレムへと戻ります。そこで 11 人の使徒たちや仲間たちが集まっていて、「主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた」と言っているのを聞きます。そして彼らは自分たちの経験も伝えます。主の復活が分かった時、彼らの暗い顔つきは喜びに、絶望は大きな希望に変えられました。その喜びと希望はそれからの生涯ずっと、彼らから消えることはなかったのです。

最後にまとめとして二つのことを述べて終わりとします。今日の箇所から私たちが思いを巡らす一つのこととは、「私たちとともに歩いてくださるイエス様」ということです。私たちが気づいていない時も、イエス様はそうしてくださっている。私たちがイエス様を信じるまでの歩みにおいてもそうです。なぜ私はイエス様がおられることを信じ、イエス様に信頼する喜びを知るに至ったのでしょうか。それは私がまことの神を知らない暗い道を歩いていた時にも、イエス様が私に寄り添って一緒に歩いてくださったからではないのでしょうか。信仰を持った後もそうです。様々な困難や苦しみのために、あるいは自分の罪のために、イエス様が見えなくなり、一人で暗い道を歩いているような時があるでしょう。しかし私たちは覚えたい。そういう

時も神は私たちを見捨てておられない。私たちが気がつかないだけで、イエス様はこのように共に同じ道を歩いてくださっている。むしろ私たちの人生における暗い道は、イエス様と私たちが出会うための場なのです。目が開かれるなら、イエス様が傍らにいてくださるといふ素晴らしい事実を知る時として、イエス様はそれを用いてくださるのです。

そして、もう一つ覚えたいことは、イエス様がそのようにご自身を現わしてくださる方法は御言葉によって、ということです。私たちは人生の様々な状況の中で、御言葉に耳を傾け、御言葉に聞くことによってこそ、イエス様を知ることができるのです。ただ受け流して聞くのではなく、「主よ、いっしょにお泊まりください」と言って、御言葉を聞いて主との交わりを求め、主を迎え入れる時に知るのです。イエス様が生きてここにおられ、私の歩みに伴い、導いてくださっているということ。私たちはその時、心が内に燃やされているのを発見するでしょう。神がこのキリストにおいて、どんなに私をあわれみ、愛してくださっているかを知るからです。またこのキリストにあって、私のこれからの将来にはどんなに素晴らしい栄光が備えられているかを見て取るからです。イエス様は「苦しみを経て、それから栄光へ」と入られました。そのイエス様を信じる私も、必ずそのように導いていただけるからです。